

「キャリコ裂き」の成立

——18世紀初頭ロンドンの騒擾をめぐるステレオタイプの用法について——

萩田 翔太郎

はじめに

1719年6月10日、ロンドンのスピタルフィールズで騒擾が発生した。絹織物の織布工が、街頭でキャリコのガウンを着ている女性を見つけると、それを後ろから切り裂いたのだ。似たような騒擾は1720年までロンドンで頻発し、「キャリコ裂き (calico-tearing)」と呼ばれた⁽¹⁾。

本稿の目的は、「キャリコ裂き」についての報道と論説を頼りに、当時の人々がどのように事件を説明したのかを分析することである。ここで説明というのは、主に新聞に掲載されたニュースや論評のことであり、執筆者が読者の理解可能性を想定して描いた事件の姿とそれに基づいて展開した議論のことを指す。本稿は、当時の説明を導いていた2つの方法として、特にジェンダー化と戦争の喩えに注目し、特定の事件の説明が「現実」として受け入れられ浸透していくための条件について考察する。

結論を先取りすれば次のようになる。「キャリコ裂き」の説明においては、事件当時から男性生産者と女性消費者の対決の場面ばかりが注目され、それが最近の研究まで踏襲されてきた。「キャリコ裂き」とは、即ち女性が着ているキャリコを裂くことなのだから。しかし、当時の説明にはなぜか事件を戦争に喩えるものがあった。こうした例に注目すると、キャリコを裂くことにはあまり触れず、したがってジェンダー化を伴わない社会批判の試みがあったことがわかる。確かにジェンダーに注目することは素朴な事件描写の方法であるとともに鋭い分析方法だが、そのためには「キャリコ裂き」を当時の新聞に満ちていた絶え間ない戦争報道から明確に区別しておく必要があった。当初、事件の説明は戦争報道の影響を強く受けていた。やがて、キャリコを着る女性のステレオタイプが急速に人気を集めたことで、ジェンダー化の方法が一般化し、戦争の喩えと重なることなくこれに取って代わったのだ。こうした2つの説明方法のすれ違いを考察することで、本稿は18世紀の騒擾を叙述するためのより複合的な視座の獲得を目指す。以下では、まず研究史を振り返りながら本稿の背景を説明したい。

1. 研究動向

キャリコ裂きは歴史家の間で古くから知られていたものの、詳しい分析をした研究は極めて少ない。というのも、男性生産者が女性消費者を襲ったことが事件の核心だとすると、生産者側の暴力性が目立ってしまい、労働者の社会的抗議の歴史に位置付けるだけでは話が済まないからだ。それゆえ、生産者の側からの見方に加え、キャリコ消費をめぐる論争からの見方と消費者の側からの見方という、大きく分けて3つの研究方向が発展することになった。いずれの場合でも、キャリコを裂くことが問題の核心に置かれていることは変わらず、要はこの暴力をどのような歴史的

背景の前に置くかが問われてきたのだ。以下、研究史を整理しながら、暴力をどう説明するかではなく、むしろ暴力を説明することそれ自体の意味を考える方向へと問いをひらいていきたい。

労働運動史研究では多くの場合、ロンドンの織布工が政治化する18世紀後半に焦点が絞られ、キャリコ裂きはその前史に過ぎなかった。特に注目されたのは、賃金や労働慣習をめぐる抗議運動が活動家ジョン・ウィルクスと交わる1760年代後半と、織布工が最低賃金を定めたスピタルフィールド法を勝ち取る1770年代前半であった⁽²⁾。それ以前の事例を扱う場合でも、織布工が織機を破壊した1675年の騒擾や東インド会社本社を襲撃した1697年の騒擾など、労働者による抗議のパターンを析出することが目的とされた⁽³⁾。端的に言って、これらは「ラダイト以前」の段階なのである⁽⁴⁾。しかし、こうした研究は生産の場における闘争にのみ注目しており、スピタルフィールドの織物産業の複雑さを軽視している。なぜなら、この地の主要製品はぜいたく品の絹織物であり、その生産活動は変動しやすい消費動向に左右されるものだったからだ⁽⁵⁾。E.P. トムソンの食糧騒擾の研究が小麦などの生活必需品をめぐる消費者の倫理（「モラル・エコノミー」）を対象としたように、騒擾と消費の関係は社会史の重要なテーマであった⁽⁶⁾。しかし、トムソンの研究モデルが労働運動にも適用されるにつれて、生産者の闘争のみが語られるようになっていった⁽⁷⁾。キャリコ裂きは生産者の闘争に消費者の意向を絡ませることを要請する。

キャリコ消費の問題を論じてきたのは経済史家である。というのも、キャリコをめぐる展開された論争は、経済的なもの（あるいは「市場」）が思想や論争の対象となる初期の例であったからだ⁽⁸⁾。機械生産が本格化する1780年代まで、キャリコ（インド綿）は香辛料や茶と並び、東インド会社によってもたらされる「ぜいたく品」であった。増加する東インドからの輸入品の需要は、伝統的な毛織物と絹織物の産業を圧迫する。すでに1620年代から外国貿易は政治的論題となり、この時期から自律的な市場という発想が論争に登場してくるが、これがよりはっきりと主張されるようになるのが17世紀末、キャリコをめぐるなのである⁽⁹⁾。東インド会社を支持する陣営は、商業は自律的なものであり政府の関与から自由であるべきと主張した。国内の製造業界はこれに反発し、むしろ外国貿易と外国製品の消費は国内産業を保護するよう規制されるべきだと返した。経済史家はこの論争を経済思想の萌芽とし、「重商主義」と呼び馴らされてきた時期の経済論の内実を明らかにできると考えた⁽¹⁰⁾。最近の研究はこの論争を同時代の党派対立や帝国主義の問題と絡めて再検討している⁽¹¹⁾。ただ、経済史家は労働者の起こす暴力事件が産業と貿易をめぐる論争の中でどのような役割を果たしたかを検討しようとはしない。キャリコ裂きにしてもどこか対岸の火事のように、研究の主眼はあくまで著述家たちの論点や利害関係の整理にあった。

消費者が被る暴力を研究の主題としたのは、「消費文化」の研究者であり、それはジェンダー論として展開する。17世紀末から18世紀初頭のキャリコ人気は、消費者の需要が社会的影響力を発揮し始めた端的な証拠とされた⁽¹²⁾。近年、多くの研究者が消費の観点から産業革命史に新しい光を当てている⁽¹³⁾。彼らは生産機械の発明から模倣的消費へという道筋で産業革命を論じるのをやめ、模倣にもとづく技術革新とグローバルな消費需要の展開により生産が促進されたと論じる。この技術革新を陰で支えたのが女性の賃金労働者であり、彼女たちこそがキャリコなどの「ぜいたく品」の消費者でもあった。

ぜいたく品を身にまとう女性こそは当時の文化的想像力を支配した存在だったのだ。ローラ・ブラウンが論じたように、外国の衣服や宝飾を身にまとう女性は、オーガスタン期の文学にお馴

染みの主題であったが、その原型は古代ローマの詩人ユウェナリスの第6の風刺詩にあるとされる。そこでは、ぜいたくに溺れ規範を逸脱するさまざまな女性が、ローマ社会の荒廃を示す記号として登場する。ブラウンによれば、17世紀末から18世紀初めの詩人たちが商業化の問題を描く際、この女嫌いの風刺詩が基本的モチーフとなったという⁽¹⁴⁾。確かに、キャリコ論争中に出版されたパンフレットやバラッドでも、「キャリコ嬢 (Calico Madams)」という表現が頻出し、社会に災いをもたらすとされた⁽¹⁵⁾。

消費文化史家はキャリコ裂きをこの女嫌いのステレオタイプと重ね合わせる。そして、女性の消費のみを産業不振の原因とみなす言説と似たようなものを織布工の暴力に認めるのである。たとえば、クロエ・ワグストン・スミスは、「街頭で女性を襲撃した織布工は、女性の身体を経済論争の中心に置く批評家たちのレトリックを体現してみせたのだ」と述べ、ジョナサン・イーコット曰く、「織布工は高慢にも、ほとんどが想像上の敵から国を守るというアイデンティティを自ら身にまとった」のであり、「キャリコを着る女性や子供たちはその犠牲者だった」⁽¹⁶⁾。両研究者は騒擾の形式と論争の言説とが共に女性のあり方を問題にしていたと示唆する。キャリコ裂きはジェンダー化されたイデオロギーに支えられていたというのだ。こうして「モラル・エコノミー」の研究がジェンダー論と出会う⁽¹⁷⁾。キャリコ裂きは女性の身体が消費の倫理をめぐる論争の主戦場であったことを示しているというのだ。

2. 問題設定と史料紹介

このようにキャリコ裂きは、商業の拡大によって出現した消費社会の孕む軋轢が女性に対する暴力という形で表出した例として議論されてきた。それは社会史でも経済史でも中心的には扱われず、女性消費者という存在に焦点をあてた消費文化史において初めて重要なテーマになった。

しかし、キャリコ裂きを女性に対する暴力と単純化して理解することには、慎重でなくてはならない。事件当時、多くの論者が織布工を弁護したのは確かで、彼らが女嫌いの言説に依拠していたのも確かである。だが、キャリコ裂きという事件の重要性はそうした文化的背景にだけでなく、その表層、すなわち事件の描写それ自体にもあるからだ。

まず注目したいのは、キャリコ裂きが単に事件として起きただけでなく広く報じられたことである。5件の裁判を除けば、我々の手元にあるのは、キャリコに身を包んだ女性を襲う織布工についての報告や論評である。ナタリー・ロスシュタインは、なぜキャリコをめぐる論争の中で、スピタルフィールズの織布工がよく言及されるのかと問うたことがある⁽¹⁸⁾。彼女は発展させなかったが、この問いは「スピタルフィールズの織布工」のステレオタイプとしての面を示唆している。実際、キャリコをめぐる論争においては、「消費する女性」と並んで「暴力を振るう織布工」が重要な位置を占めていた。東インド貿易の支持者は、織布工が女性を標的にしたことを糾弾し、そこに彼らの根源的な性悪さを読み取った⁽¹⁹⁾。一方、毛織物業の擁護者は、暴徒となったのは織布工のうち貧しい一部の層に限られるとしながらも、彼らの暴発が産業全体の抱える窮状を示しているとみなした⁽²⁰⁾。つまりどちらの場合も、スピタルフィールズの織布工という存在は暴力的であるがゆえに言及に値したのだ。その暴力が説明を要したというより、何かを説明するものとして参照されていたのである。

ロンドンの東の郊外に位置するスピタルフィールズは無秩序のイメージと縁が深かった。この

地は古くから絹織物の生産拠点であったが、特に1685年以降、ナントの王令廃止を受けてユグノー移民が流入したことで、急速な成長を経験する。一方、南に隣接するステップニーやウォッピングなどの港湾地区は、インドやレヴァントからさまざまな商品が到着する貿易拠点であり、商船員を客にとる酒場や娼館が点在する地域でもあった。ウィリアム・ホガースが連作『勤勉と怠惰 (*Industry and Idleness*)』(1747年)で描いたように、ここは成功と凋落の分岐点なのである⁽²¹⁾。すでに16世紀から、市権力が及ばない犯罪と不道德の地として、バラッドや物語の舞台となってきた⁽²²⁾。18世紀を通して展開された労働争議も騒々しさに一役買っている。これらは、やがて19世紀に「見捨てられたロンドン (Outcast London)」として共有されることになる貧困と犯罪のイメージの端緒であった⁽²³⁾。歴史家がこの地の「急進的」伝統や労働争議の歴史を語る際にも、これらのイメージは部分的に踏襲されている⁽²⁴⁾。近世以来、作家や評論家、都市探検家や歴史家は、「社会問題」の温床として、あるいは社会の矛盾を映す鏡として、この地に注目し続けてきたのだ。スピタルフィールズとは社会批判のトポスなのである。織布工の暴力もこの次元で理解したい。

本稿の目的は、キャリコ裂きをめぐるステレオタイプのイメージを「事実」に即して検討するのではなく、むしろ、論争において重要な役割を担ったものとして、その働きを積極的に理解することにある。ステレオタイプの内容ではなく、その使われ方と使われた環境を研究対象にするのだ。

キャリコ裂きをステレオタイプの問題として扱うことは、党派対立という社会背景からも要請される。社会が2つの党派に分断されている、という認識は18世紀前半を生きた人々が共有するものだった。これは17世紀半ばの内戦に端を発する意識であるが、それを維持・促進したのが当時のあらゆる出版物にあふれていた政治党派のステレオタイプだった。内戦期には「円頂党 (Roundheads)」と「王党員 (Cavaliers)」、17世紀末には「ウィッグ (Whigs)」と「トーリー (Tories)」との対決が図式化され、1715年以降は「ハノーヴァー派 (Hanoverians)」と「ジャコバイト (Jacobites)」に重なってゆく。これらの対決を彩ったのは髪型や服装、口癖や社会的出自などの差異である⁽²⁵⁾。党派のステレオタイプは出版界を賑わせる格好のネタであり、パンフレットや版画などにくり返し登場した⁽²⁶⁾。1690年代から本格化するキャリコ論争は、「スピタルフィールズの織布工」や「キャリコ嬢」といったキャラクターも含め、党派対立の文脈で検討する余地があるのだ。

1710年代末のキャリコ裂きを党派のステレオタイプと併せて考察するには、週刊新聞という媒体に注目しなければならない。事件は週刊新聞において最も頻繁に報じられていたことに加え、1688年から激化する党派争いがこのメディアにおいて新たな展開を見せていたからだ。

1695年に出版検閲法の更新が頓挫して以来、定期刊行の新聞が出版界に登場する。ウィッグ系の『フライング・ポスト』[1695~1731年、以下FP]とトーリー系の『ポスト・ボーイ』(1695~1728年)を筆頭に、週3回発刊された新聞は党派対立を過熱化させるのに一役買っていた。1712年に印紙法が議会を通過し、定期刊行物の税額を上げることで新聞業界の封じ込めが図られた。ところが、法令では「新聞」が1枚刷り(裏表2ページか半分折って4ページ)のものと想定されていたため、半紙を間に挟んで6ページの「パンフレット」に仕立てて規制を免れる抜け穴がすぐに発見される。ページ数の増加はより多くの記事が必要になることを意味する。このため、文芸雑誌『タトラ』(1709~1710年)や『スペクテイター』(1711~1712年)で人気を博

した道徳的エッセイや読者投稿などが新聞に持ち込まれることになった⁽²⁷⁾。これらの雑誌はそもそも当時の習俗を批判し読者を啓蒙することを目指しており、女性のファッションはその標的の筆頭だった。しかし、これと並んで、新聞という情報媒体が作り出す消費文化もよく取り上げられる話題だった⁽²⁸⁾。たとえば、リチャード・スティールは『タトラ』において、新聞の読者が内容を深く読まないこと、何でも新しい情報を追い求めるように条件づけられてしまうことに不安を表明し、これを騎士道ロマンを追いかけるドン・キホーテになぞらえた⁽²⁹⁾。1枚刷り週3回発刊という『タトラ』の出版形態は当時の新聞を模したものであり、これは日刊の後継誌『スペクテイター』によって促進される。両誌とも読者の消費文化を内側から変革しようとしたのだ⁽³⁰⁾。そこでは「噂好き (Quidnunc)」といった新聞読者のステレオタイプも登場する⁽³¹⁾。こうした新聞に対する習俗改革の試みは、1710年代に登場した週刊新聞によって新聞の内部へと、一定の緊張を孕みながら、制度化されてゆく。

出版規制の副産物とも言える週刊新聞において、党派争いは同新聞紙上のコンテンツに拡散していった。各紙が特定の党派性を帯びているのは当然としても、1つの党派の新聞に例えば読者投稿という形で別の党派性が侵入することが可能となったのである。

週刊新聞紙上における複雑な党派関係は戦争報道をめぐって先鋭化される。なぜなら、『タトラ』と『スペクテイター』が登場した時期はスペイン継承戦争と重なり、これらの新聞批判の多くはイギリス最初の日刊紙『デイリー・クアランツ』〔1702～1735年、以下 DC〕による戦争報道に向けられていたからだ⁽³²⁾。DCの特徴は人的損害を含む詳しい戦況報告で、同時期に編まれた戦争詩の世界観と一線を画すものだった⁽³³⁾。文芸雑誌が好むような古典的戦争像ではないリアルな戦争報道は、ウィッグ政府の戦争政策を批判する風刺家たちの創作の材料にさえなった⁽³⁴⁾。1713年の終戦以降に続々と登場する週刊新聞の海外ニュース欄には、確かに戦争報道が消え、戦争から文芸への移行を画したかに見えた。しかし、後述するように、1718年に再開する大陸での軍事衝突を機に戦争ニュースは週刊新聞に再登場し、それを再び（党派的に）批判するエッセイや読者投稿と緊張を生むようになる。キャリコ裂きの報道はこうしたメディア環境の中で開始されたのだ。

以上で紹介した党派対立、週刊新聞、戦争報道の3つは、本稿がキャリコ裂きを新たに位置付け直すためではなく、キャリコ裂きの説明が特定の方向へと条件付けられた経緯を示すために引き合いに出したのである。これは従来の研究とは本質的に異なる問題関心である。「キャリコ裂き」を織布工が女性の着るキャリコを裂いた事件だと了解した上で研究を始めるのではなく、そのような了解を1つの妥当な説明方法として扱い、その妥当性を支えた状況を理解すること、つまり、何がそれに現実味を与えたのかを当時の状況に探ること、これが本稿の目的である。そこで、改めて新聞報道を読むと、戦争の喩えが事件を描写する上で重要な役割を果たしていたことに気づく。そうした報道の背景に同時代の戦争と戦争報道をめぐる論争を想定すると、週刊新聞というメディア環境がキャリコ裂きの説明を反戦論へと導いていた状況が浮かび上がってくる。しかし、戦争の問題はすぐに論点から遠のき、代わりに女性のファッションの問題が前景化していったのも確かであった。端的に言えば、これが「キャリコ裂き」の背景として定着したのだ。このように、戦争からファッションへの話題転換を事件の背景として再発見することで、本稿は騒擾のある仕方でも説明することそれ自体の政治性を問題化するのである。

3. キャリコ裂きの報道

事件当時の新聞を読んでいると、「キャリコ裂き」とは言われるものの、織布工がキャリコを裂く場面を間接的あるいは二次的にしか描写せず、むしろ織布工の集団行動や治安部隊との戦闘場面に注目する報道が多くを占めていることに気づく。そうした事例は、キャリコ裂きが男性による女性への暴力だけを意味したのではなかったことを示唆している。本章では、こうした事例をいくつか紹介し、それらがキャリコ裂きを用いて何をしているのかを考察する。

1719年6月、一連の事件で初期の事例をおどけた調子で報じたのは『ウィークリー・パケット』〔1712～1721年、以下 WP〕であった。

数千人の織布工が非常に騒々しく集まり、出会った女性でキャリコを着ている者全員に乱暴した。このため、市長、州長官および治安判事たちは衛兵の補助を要請するとともに、民兵を召集して鎮圧することを余儀なくされた。近衛衛兵隊が近づくと、織布工は姿を消し、いくつかの集団にわかれて行進し、市郊外のキャリコ印刷工房を襲撃した。南への侵入を防ぐため市の橋門は閉鎖されたが、大部分は東へ向かい、多数の小型快速帆船に乱入し、その索具に損害を与えた。織布工の首領であるシャトル代将は捕まり、ホワイトチャペル債務者監獄に収監されたい。このうわさは冗談だろうが、織布工がとった性急で異例の行動を表すのに、これ以上のうまい言い方はない。適切な請願と陳情がなされれば、政府は疑いなく、欠乏と困窮にあえぐ幾多の職人を切り捨てるより業界から邪魔な小枝を落とす方に同意するだろう。⁽³⁵⁾

この報道は、織布工の集団行動の展開を伝える前半部と、それを批評する後半部から成る。批評が「冗談だ」としているのは、まず「シャトル代将 (Commodore Shuttle)」という名前であろう。杼 (shuttle) を織布工のキャラクター名に用いるのは当時よくあった。たとえば、1717年に出版されたパンフレット『ジョン・シャトルとその妻メアリ』では、スピタルフィールズの親方「ジョン・シャトル」、いとこで水夫の「ジェレミア・シャトル」、そしてジョンの愉快的隣人「ブリストク氏」による時事的対話が収録されている⁽³⁶⁾。このニュースも同じように、事件の報道を超えた広がりがあるように思えるのだ。「シャトル」が機織りの道具を換喩的に人名化したものだとして、「代将」という海軍の称号も杼の船のような形に由来しているのだろう。ここから、織布工の行動が海事表現で語られる余地が生まれる。「シャトル代将」の艦隊と呼ぶべき織布工の集団は停泊していた商船とその装備を攻撃するわけだが、それらが「小型快速帆船 (light Frigates)」と「索具 (Rigging)」と表現されている。前者は「めかしこんだ女性」の隠語であり、したがってその索具に損害を与えることは「紐を解くこと (unrigging)」、つまり女性を脱がせることを暗示する⁽³⁷⁾。女性を船に喩える伝統的な表現であるが、その風刺的效果は消費する女性を介して実は織布工の自惚れにこそ発揮されるのではないだろうか。代将が指揮する艦隊は、国の産業を守るべく海戦を繰り広げるが、その行き着くところは女性の服を脱がすことだからだ。

別の週刊新聞『ウィークリー・メドレー』〔1719～1720年、以下 WM〕は同じ事件を少し違った言い方で報じている。

6月10日と11日、聞くところによれば5千人近く数える大勢の織布工が暴動を起こし、商売の衰退を口実にして、シティの各所で狼藉を働いた。暴動の熱狂は主に女性に向けられ、彼女たちのキャリコは新しく泥で染め直されたか、ぼろきれにされた。その熱狂のまま、彼らはさらに倉庫を襲い、中の弾薬や食糧を破壊した。そして彼らは別個の部隊に分かれた。サザークの部隊はウォンズワースへ向かい、印刷工房でキャリコを見つけて破壊するつもりであったようだが、実行に移したのかどうかは知らない。ホワイトチャペルの部隊は衛兵の接近に伴い、当初は抵抗の姿勢を見せたと聞くが、考え直してボウまで撤退したらしい。彼らの何人かは捕まり、監獄へ収監されたという。しかし、別の情報では、ホワイトチャペルの2人の治安官が殴り倒され、ひどい怪我を負ったという。別の者たちも騒動を鎮めようと努める中で命の危険に遭った。これが事態について我々の知るすべてである。この事件はあらゆる人の口の上っており、世間のたいへんな評判になっている。⁽³⁸⁾

キャリコ裂きが捺染工程や生地の薄さにかけて冗談のように語られているのは事態を軽視しているようにも思えるが、むしろこの記事が目しているのは織布工の「部隊」としての行動である。WPに比べるとより平易な表現で、騒擾がまるで戦場での作戦であるかのように描写されている。すべて伝聞情報であることが逐一強調されているのも特徴的である。

先のWPは次の週も風刺的な物言いで騒擾の展開を報じるが、その焦点も織布工の戦闘場面にある。

織布工の間で猛威をふるっていた熱は少し和らいだ。彼らの意識が朦朧としているうちは、キャリコを着た人びとに硝酸を浴びせ、彼らの狂気の対象を汚して台無しにしていたものだ。他の者も同じく標的を急襲し、背後からキャリコを剥ぎ取って切り裂いた。衛兵と民兵が鎮圧に努め、1人の民兵は狂人仲間を救いだそうと押し寄せた織布工の集団に向けて発砲し、うち1人を死に至らしめ、3、4人に傷を負わせた。数人はニューゲート監獄、マーシャルシー監獄、そして〔ウッド・ストリートとポールトリーの〕小監獄に収監された。しかし、多くは依然として落ち着かず反抗的で、もっと涼しい季節にならないと完全には回復しないだろう。⁽³⁹⁾

ここでも熱狂という言葉が使われるが、織布工の異常性と暴力性が強調されているというよりは、涼しくなれば治るという表現にある通り、キャリコ裂きがあくまで一時的なものであることを示唆するためであるようだ。キャリコは「意識が朦朧としている」彼らの標的でしかなく、その妥当性には留保がついている。一週間前の記事に比べるとおどけた調子は抑えられており、描写の中心にあるのは暴徒と民兵の交戦、そして前者の死傷である。

これらの記事には「キャリコ裂き」の所以たる織布工と女性の接触が周縁的あるいは暗示的にしか出てこない。こうした描写を事態の軽視と断じずに積極的に理解してみたい。というのも、WPが報じた「シャトル代将」とその愛国的な海戦や他の記事で描写された暴徒と治安部隊の交戦場面は、女性の消費とは異なる問題を指し示すために織布工の暴力が参照されていた可能性を示唆しているからだ。次章では、騒擾報道における戦争のメタファーの意味を当時の戦争報道と

いうメディア環境の下で考察する。

4. 党派対立と戦争報道

週刊新聞における戦闘描写の背景を知る上で、週刊新聞ではないがウィッグ系の新聞FPの6月27日付の記事は多くの示唆を与えてくれる。

紳士諸君には明らかなことだが、マーシャル伯とシーフォード伯、そしてタリバーディン侯とジョージ・マレー卿の行いは来るべきスコットランドのジャコバイトの作戦に対する枢機卿の自信を高めるだろう。ちょうどバンヒル・フィールズの軍隊による栄えある征服があなた方への期待を高めたように。ご存じと思うが、そうした闘士たちは、彼らが勇敢にもアマゾンたちから奪い取った捺染キャリコの旗を枢機卿に示すことができるし、次のような朗報を届けることも可能なのだ。すなわち、クラーケンウェルとニューゲートの宮殿を占領したこと、まもなくヒックス・ホールとオールド・ベイリーに凱旋入城できること、そして本作戦の締めくくりにパディントンの砦で国王ジェームズ3世の即位を宣言する予定であることだ。⁽⁴⁰⁾

ここで言われている「枢機卿」とはスペインの宰相ジュリオ・アルベローニのことである。以下で説明するように、彼とジャコバイトをめぐる1719年の事情は当時のメディアがこぞって話題にしていた。「バンヒル・フィールズ」とはシティの北の郊外にある非国教徒の墓地で、「キャリコの旗」掲げる軍隊とは織布工を指している。つまり、キャリコ裂きをアルベローニの野望に資する「征服」行為であると言いつつ、一方で織布工の宗派も強調することでスペインやジャコバイトと区別している。両者は結び付かない結び付きなのだ。さらに、織布工がクラーケンウェルやニューゲートといった監獄に投獄され、ヒックス・ホールやオールド・ベイリーといった法廷に召喚され、(パディントンの南東に位置する)タイバーンの絞首台で処刑される顛末も侵略の延長のように語られているのが笑いを誘う。着実に封じ込められているにも拘らず騒擾に期待を寄せるジャコバイトの虚しさが漂う。FPの記事において織布工の騒擾は党派対立の具になっており、事件を報じるというより事件を使ってジャコバイトを攻撃することに重きが置かれている。

これに対するジャコバイトの側の反撃も面白い。ナサニエル・ミストの『ウィークリー・ジャーナル』〔1716～1728年、以下WJS〕の1719年8月8日の記事はその一例である。

織布工は今週また少し評判になり、彼らの友人たちの希望とは裏腹に、橋を破壊しムーアフィールズでも暴れたことで、ウィッグの情報屋たちが毒づくネタになっている。忍耐と辛抱を命じるだけで苦難を軽減しないのが不条理でないなら、我々としては彼らにもっと穏健な方法をとるよう勧めたい。聞くところによれば、彼らの家族はみな仕事がなく極限まで飢えている、商売が立ち行かない、キャリコの着用が今後も許され正戦なのは疑いないスペインとの戦争が続くなら10万の同胞は別の仕事を探すしかない、さもなくば地域で保護されて国の負担になるか、あるいは死ぬしかないという。⁽⁴¹⁾

非国教徒の多い織布工はハノーヴァー朝の熱心な支持者であり、彼らの暴力事件は「友人たち」、すなわち人民の代表を標榜するウィッグの政府にとって微妙な問題であった。この記事は織布工に「穏健な (moderate)」方法を勧めているが、これは名誉革命に際してウィッグ政権が進めた文化政策（主に習俗改革、宗教寛容、出版規制の緩和）への間接的言及であろう⁽⁴²⁾。これを政権の支持者の窮状と暴力に対置することで、政策の形骸化と社会の矛盾を描き出しているのである。

新聞記事の中には織布工の騒擾を戦争のように描写するものがあつたことは前章で確認したが、FPとWJSは一步進んでスペインとの戦争に言及している。まず、これは何のことなのか。

1718年後半から約1年間、イギリスは3つの軍事衝突を経験していた。1719年5月、オーモンド公率いるスペイン艦隊がブリテン島南西岸の侵略を試みていた。同じ頃、スコットランドでジャコバイトの部族たちが蜂起する。これらの侵略は、1718年7月に始まるスペインのシチリア遠征に端を発するヨーロッパでの軍事衝突の一部であった。スペインは1713年のユトレヒト講和条約の再考を迫るつもりで軽装備の艦隊をシチリア島の沿岸に派遣していたが、これが1718年8月、ビング提督の率いるイギリス艦隊に正式の宣戦布告なく砲撃を受け、戦端が開いてしまう。パッサロ岬の海戦と呼ばれるこの事件は、イギリス・フランス・オーストリア・オランダの四国同盟（のちにサヴォイアも加盟）による秩序体制の崩壊を意味し、1720年初頭に和平が成立するまでヨーロッパの各地で戦闘が頻発していた⁽⁴³⁾。

こうした情勢を背景としながらも、先の2つの記事がどちらも風刺的な物言いであつたことには注意したい。本稿も織布工がジャコバイトの尖兵だとか、スペインとの戦争で織布工が疲弊したとかと主張したいのではない。当時、騒擾と戦争を比較する際には様々に巧妙な方法が取られていた。注目したいのは、週刊新聞という媒体がそれらのレトリックをどこまで現実味を帯びたものにしていったのかである。そこで鍵となるのが戦争報道なのだ。

1719年当時、日刊のDCや週3回発刊のFPは戦争報道で溢れており、事情はWPやWMなどの週刊新聞でも同様だった。キャリコをめぐる騒動はこうした戦争報道が常態化したメディア環境で起こつたのであり、風刺的な騒擾報道が現実味を帯びるか否かは戦争報道のあり方にかかっていたと言える。

多くの週刊新聞はスペインとの戦争を同盟軍側の被害を矮小化して報じた。典型的なのは、実際の戦闘場面をぼかし、勝利のみを強調するものである。たとえば、スペインのバスク地方にあるオンダリビアでの攻囲戦について、ウィッグ政府の機関紙的性格をもっていたジェームズ・リードの『ウィークリー・ジャーナル』〔1715～1761年、以下WJB〕は状況を淡々と伝える手紙を引用する。「突撃で突破口が開き、200人の守備隊は60人ほどが死傷したのち降伏、捕虜に。こちらの犠牲は7、8人のみ⁽⁴⁴⁾」。他の軍事作戦についても、この新聞の戦争報道は基本的にこの調子であった。事情はジョン・アップルビーの『ウィークリー・ジャーナル』（1715～1736年、以下OWJ）でも変わらない。たとえば、シチリア島のフランカ・ビラ近くでの戦闘については、オーストリア軍側の「日誌」を掲載して曰く、「本作戦における我が軍の損失はおよそ2500名の死傷、名簿は依然準備できず、但し死者は少数なり⁽⁴⁵⁾」。多大な犠牲を報じながらも、これらの報道はその重要度を減らし、状況を同盟軍側に有利に描くのである。

一方、先に引いたWJSはむしろ戦闘による損害に焦点を当てた。たとえば、シチリア島フランカ・ビラの戦闘でオーストリアの将軍ド・メルシー伯が負傷したことについては、本人が「当

方は腎臓に重傷を負い、銃弾依然として体内にあるため、指揮をユンゲン氏に任せざるを得ず。事態極めて困難につき、指揮官たち曰く、敵陣を一齐攻撃すれば多大な犠牲出ること必至なり⁽⁴⁶⁾と伝える投稿を掲載した。続く報道では、「勇敢なドイツ人は臆病なスペイン人に完全にやっつけられ、4000人以上が殺され、ある情報では3000人が捕虜になり、また数千人が負傷したことは疑いない」と惨憺たる結果を予想している⁽⁴⁷⁾。別の戦闘場面では、「竜騎兵隊長のラスピナン氏は砲弾で死亡、ド・コイニ氏とド・ラ・フェル氏は服が血まみれに、またラスピナン氏の足から吹き飛んだ骨の破片でド・フキエ侯が負傷し目玉が飛び出た⁽⁴⁸⁾」と報じる。こうした被害報道はWPにも散見されるが、その執拗さの点でWJSは際立っていた。

では、騒擾を戦争と並べて読むとどうなるだろうか。

一部の読者はWJSの騒擾報道を確かに警戒しており、読者投稿という形で様々な介入が試みられることになる。たとえば、早くも1719年6月27日の刊では、ある投稿者が「織布工をひどく哀れに書く」ミストに警告を発する。

すべてがキャリコを着るせいだなどとは言うまい。織布工も、あなたや私と同様に、他に不況の原因があることに疑いは挟まないだろう。しかし、今は適切な時期ではないために、彼らはたぶんそれらの原因に言及したがるのだ。私はそれらを口にはしない。もし織布工もそうなら、彼らの節度は尊重されるべきだ。⁽⁴⁹⁾

歯痒い言い方である。「今スペイン王と戦争中なのは誰もが知っている」と別の投稿者はもっとはっきり認めるが、「これはトーリーの連中がミストを崇拜し、彼を偶像化する絶好の機会であろう。こういう正統のうわさ好きは、自分の国の利益に反対する姿勢をとって鼻にかけるのが常だ⁽⁵⁰⁾」というように、話題はあつという間にミストの党派性のステレオタイプに転じてしまう。ミストへのこうした攻撃は枚挙に暇がない。曰く、ミストの新聞は「敵を驚異で満たし」「我らの兵士を不安にし、女性を憂鬱にし、子供たちを怖がらせる⁽⁵¹⁾」。曰く、ミストは「占い師」あるいは「手品師」で、「5000の予想のうち1つでも当たると自慢する」⁽⁵²⁾。曰く、ミストは「ジャコバイト特有の大言壮語」に長けていて、「スペイン語を翻訳する際に、あの言葉数の多い言語独特の言い回しを取り違えた」⁽⁵³⁾。曰く、ミストは雄鶏が「羽根をばたつかせて鳴き声を上げる」のと同じで干ばつや疫病などをいちいち警告する⁽⁵⁴⁾。

したがって、騒擾と戦争は明確には結びつかなかったはずだ。両者は同じ新聞紙上に共存していたし、体制・反体制の両立場の論評でも稀に言及されることさえあった。しかし、週刊新聞の紙上では、キャリコ裂きとヨーロッパの戦争は併存するが直接交わることのない2つの話題でしかなかった。党派的戦争報道の代名詞だったミストの新聞だけが、スペインとの戦争を織布工の暴力に重ねる視座に開かれていた。しかし、そのような視座は「節度」を欠いたものとして、ジャコバイトのステレオタイプに組み込まれてもいた。織布工の騒擾が事件それ自体を超えて社会批判的な役割を担うには大きな制限が付いていたのだ。

5. 論争のジェンダー化

前章まででは、週刊新聞においては女性のファッションがキャリコをめぐる問題の焦点になら

ない可能性があったということを確認した。本章では、ある時期を境に議論が女性へと集中してゆく過程を追う。これまでの記事は1719年6月から7月に集中していたが、以下で扱うのはジョージ1世の即位記念日（8月1日）以降のものになる。

女性のファッションが前景化する端緒と思われるのが、1719年8月15日にWJBに寄せられた投書である。投稿者はミストの新聞に対して、「戦争や疫病と同じくらい国にとって有害な存在」として、「町の淫らな女たちについての話」を掲載するよう要請したのだという⁽⁵⁵⁾。この投稿が指しているのは、WJSの8月8日号に載った投稿のことで、そこで話題にされていたのは、公開処刑を見物する2人の貴婦人の服装、特にフープ・スカートである。

彼女たちの慎ましい上半身とは裏腹に、その下半身のなんと開けっぴろげで自由なことか。もしあの服が女性の貞淑を守るものなのだとしたら、男性にとってはまったく逆であること請け合いである。女性には自分たちも罪の片棒を担いでいることをよくよく考えて欲しい。彼女らは服で男性の視線を集め、彼らを過ちへと誘うのである。⁽⁵⁶⁾

この挑発的な投稿は、WJSの8月15日の刊で2つの反論を誘発する。そのうちの1つは、知り合いの女性が投稿のせいでたいへん「気分を害した」と言い、掲載したことの弁解をミストに求めている⁽⁵⁷⁾。

重要なのは、WJSの8月15日の刊にはキャリコ裂きを批判する投稿も女性の連名で投稿され、これが反批判を呼び、同紙上で女性のファッションをめぐる論争が燃え上がっていくことだ。以下、4つの投稿を分析するが、女性の苦情を代弁しているかに見える言説が、そうして苦情を述べる女性自体を貶めてもいる点に注意したい。

8月15日の投稿は「キャリコ・サリイ、キャリコ・ベティ、キャリコ・ドル、その他大勢」〔以下「キャリコ姉妹」〕と署名され、織布工の暴力とそれを看過する人々を批判している。

私たちはいつも、イングランドの民は世界のどの国の民にも増して法によって保護された自由を享受していると思ってたし、そのように祖父からも教わってきた。自由を享受するのが誉れであると言われたし、私たちの祖父はその自由のために闘ったのだと。呪われてしまえ！彼らが自由のために闘ったのは私たちが暴行するため？通りを歩く自由は私たちに許されないの？もしそうなら、その人たちは悪党の群れだわ。自分だけじゃなくて私たちの自由も守ることができないなら、その人たちは阿呆の群れだわ。⁽⁵⁸⁾

イングランド人を自由の民だと信じる彼女たちからすれば、キャリコ裂きはそれが女性には認められていないことの端的な例なのであり、キャリコが不況の原因であるかどうかは問題ではないのだ。極めて真つ当な批判である。しかし、下層の女性（召使いか売春婦）を思わせる差出人名がそれを皮肉なものにしている。自由のための闘争という話はイングランド内戦の記憶と以後の党派対立という大きな主題を想起させるが、これが矮小な次元で展開しているのだ。実際、「キャリコ姉妹」の権利主張はあくまで消費者としての主張なのである。彼女たちはキャリコの服を購入するときにも何も警告を受けなかったと弁明し、「もし上品な模様のすきまに、地味な文字で印刷されてたなら、それにキャリコを売ってくれる服屋さんがいつもうすら笑いしながら、奥さん、

キャリコいかがですか、お召しになったらきっと織布工に通りで襲われますよ、後ろから引き裂かれますよ、って言うてくれたらいいのに」と買い物場面を引き合いに出して嫌みを言う。警告が模様混じった服も警告しながら商品を勧める服屋も稀有なのであり、これらの要求は荒唐無稽にしか聞こえない。そして最後に、スピタルフィールズで織られた布は今後一切着ないとボイコットを宣言するのである。その人格がキャリコに喩えられているのに似て、彼女たちの意識も薄っぺらいもののように読めてしまう。

一週間後、WJSが掲載したのは「キャリコ嫌い」から「キャリコ姉妹」への反撃である。投稿者は冒頭で、キャリコ裂きと党派対立を区別しようとする。

彼らは他国の王や僭称者には干渉しない。今の政府を支持しているからだ。彼らはキャリコを裂くとき「ジョージ王よ永遠なれ」と叫んだのだ。彼らの関心はつましい生活にある、つまりパンのために働き、黙ってそれを食べることだ。彼らは侵略と何の関係もない、捺染キャリコによる織物業界の侵略を除いては。⁽⁵⁹⁾

「キャリコの侵略」というテーマは、たとえばWPやFPのニュースにおいては単なるメタファー以上の響きをもっていたが、ここでは読者の視野を限定する装置として再登場している。党派対立と国際情勢に代わって強調されるのは、織布工の物質的な欠乏と女性の責任である。織布工に対して「彼ら」と言っていたのが徐々に「我ら」に変化する。

政府と公衆のため、我らは限界まで忍耐を貫くと決めました。政府に立ち向かおうなど考えてもいません。でも、もしキャリコのガウンが毎週日曜日に貸し馬車に乗って玄関前や歩道に現れたら、指が誓約に反逆しないとも言えないし、それを破るほどに感情が昂ぶらないとも保証できませんよ。とはいえ、こんな時に姿を見せて我らを刺激するなんて、女たちは何と愚かで意地悪なんでしょう。我らの忍耐を限界まで圧迫するよう依頼されたかのようです。どうして我らが操をぴんと張って、枠に広げておかなければならないのでしょうか。

「キャリコ姉妹」に似て、大文字の「キャリコのガウン (Callicoe Gowns)」も擬人化されている。これが「指」や「感情が昂ぶる」や「ぴんと張る」といった表現に性的なニュアンスを足している。その効果はキャリコ裂きが党派争いの次元から遠ざかることにある。政治論と絡めることが陳腐になり、男女間の問題へと矮小化されるのだ。その論旨は、女性が自分で暴力を招いたのであり、キャリコ裂きはキャリコを着た不可避の結果であるというものだ。

二週間後、今度は「ヘンリエッタ・ホームブレッド」すなわち「国産のヘンリエッタ (毛織物の一種かつ女性名)」からの投稿が掲載される。投稿者はまず、「キャリコ姉妹」が指摘した自由の問題を次のように揶揄する。

あなた方の語った自由についてですが、あなた方が教えられた通り、それが偉大で栄えあるものであることを認めます。そして、私はこの立場を強く信じます、なぜなら、あなた方が避けたいと仰るのは、スピタルフィールズを通るときはいつもキャリコ以外の

服を身につけなければならないということなのですから。ああ、なんと恐ろしい隷属でしょうか。エジプトの奴隷に勝ります。自由についてのあらゆる考えは瞬く間に消え去り、イギリスの法は崩壊するほどに揺らいでしまいます。⁽⁶⁰⁾

この大袈裟な称賛は続ければ続けるほどその対象を陳腐なものにしてしまう。その上、女性であると名乗る投稿者は女性にふさわしい振る舞い、ここでは投獄され負傷あるいは死亡した織布工への慈善活動の必要性を説く。

私には貿易と商業の極意について深い見識はありません。この度の災難をその根源までたどることも、織物業の不況に妥当な原因を割り当てることもままなりません。しかし、たとえ原因が見えなくとも、結果を見ないわけにはいきません。後者は明白で、それが見えないなら眼がないに違いないのです。また、それはとても悲惨で、嘆かないなら情けがないに違いないのです。

投稿者は読者が原因に目を向けることをけん制しつつ、受け入れるしかない現状に適切な行動を勧めるのである。曰く、「キャリコ姉妹」は「いくばくかの安っぽいキャリコを安全に所有するために、常備軍の配備を要求する」ほどに、キャリコ裂きに過剰反応していると言う。ここにも消費の次元で政治問題に触れることが小馬鹿にされている。そして、「キャリコ姉妹」をパロディーして、彼女たちがキャリコを諦めない限り「モル・クレープ（縮緬のモル）、スー・シルク（絹布のスー）、その他数千がほろを着ず、一口も食べない」ことを宣言する。

この投稿は次の週に匿名で返答される。投稿者はまず「キャリコに反対する投稿の著者は女性だったか」と問い、「ヘンリエッタ」に「誰があなたをまるで不実の姉妹のようにあなた自身の性に対決させたのですか」と詰め寄る⁽⁶¹⁾。

この馬鹿げた投稿が女性によって書かれたのではないことは明白です。こんなに不自然で、慎みがなく、滑稽なのは、暴徒が捕まえたいと思うような夜の女だけです。

この問いかけはこれまでの投稿の著者の性別をも疑問に付すことになり、結果としてジェンダーが論争の全面に出てきたことを明確にしたと言える。その上で、この投稿者は以下のような苦情を述べるのである。

誰か問いに答えて下さい。織布工には女性を見つけたらどこでも騒擾を起こして脅す特許が与えられているのですか。道行く女性の服に、馬車に、それどころか胸元にまで、硝酸を浴びせることが許されているのですか。噂によれば、ある貴婦人がこうした行為で命を落とし、別の方は死ぬほど怯えたらしいではありませんか。もしそれが許されているのだとしたら、それはどのような法によってなのですか。許されていないのなら、誰が吊るされるべきで、誰はそうでないのですか。

「キャリコ姉妹」が指摘した自由の男女差と並んで、これもまっとうな主張に読める。ただ、投

稿者が強調するのは、それが女性の苦情であることで、「女性がいかに弱き性、あるいは弱き器であること、それは認めましょう」と譲ってしまうのである。したがって、投稿の終わりで著者は「ヘンリエッタ」を「小生意気な紳士 (Mr. Pert)」とさえ呼び、自分たちから区別するのだ。

この時期になると、ミストの新聞紙上でキャリコについて投稿が交換されるのはある種の流行になり、そこでの争点は徐々にジェンダーへと収斂していったと言える。8月8日付のWJSが「正戦なのは疑いないスペインとの戦争」を問題としていたのに対し、それに続く一連の投稿は、擁護するにせよ攻撃するにせよ、議論を女性の服装に、さらには女の性に限定してしまう働きをした。キャリコをめぐる騒動がジェンダーの問題になったのである。

6. 暴力の理由

キャリコ裂きがジェンダーの問題となるにつれ、暴力を振るう織布工のステレオタイプは党派対立と戦争風刺という奥行きを失ってゆく。そして、織布工が自らの行動によって刺激した暴力のステレオタイプは、社会的スティグマとして残存するのだ。最後の章で跡付けたいのは、このスティグマの働きである。特に、メディアに登場する織布工のキャラクターが暴力を弁解する仕方に焦点を当て、キャリコ裂きが女嫌いの言説に動員されてゆく過程を追う。

前章でWJSに寄せられた「キャリコ嫌い」による「キャリコ姉妹」への反論を紹介した。ここで「キャリコ嫌い」とは、織布工を指す代名詞が「彼ら」から「我ら」に変化したことに示されるように、まさにキャリコ裂きを行う織布工のことであった。織布工のキャラクターがキャリコ裂きの動機を語ることで、その織布工の言葉として間接的に女嫌いの言説を表明できてしまうのである。こうした腹話術的な方法を以下で分析する。

キャラクター化の戦略の例として、「トム・シャトル (Tom Shuttle)」が週刊新聞『サーズデイズ・ジャーナル』(1719~1720年)に寄せた投稿を挙げることができる。「シャトル代将」と類似の換喩的偽名で書かれてはいるものの、その内容はWPが描いた愛国的海戦とは一線を画している。織布工を代表しているであろう「トム」は、一連の事件をふり返って、「我らの喜びは騒擾でも、窃盗でも、泥をぶついたり、石を投げたりすることでもない。パンを得る方がよっぽど自然だ」と、暴力の例外性を強調する。が、弁明はくり返し同じ地点に戻って来てしまう⁽⁶²⁾。

こう訊かれたら女性はどう答えるのだろうか。我らの同意なしに、どうして夫や父親や兄弟や親戚みなが生計を立てている服から正反対の誰も雇われていない服に衣替えし、国の資金を流出させ、貧民から仕事も奪い、どうして黒人、インディアン、異教徒、ムスリムに食べ物と仕事を与えるのかと。

我らは、こうした女性の愚かさ、あるいは狂気のために我らの不作法と暴力が正当化されるのだと、我らのために論じて欲しいわけではない。しかし、織布工がその暴力を女性に負っているということは、おわかりだと思う。彼女たちが我らの手に落ち、ほんのすこし乱暴に扱われたとしたら、それは我らの業界に与えた損害にもかかわらず、彼女たちがウール製品の代わりにキャリコとリネンを着ることで我らに加えた狼藉のためなのである。

暴力を正当化したいのでもして欲しいのでもないかと断っているが、結局は女性に責任を転嫁したいのである。女性の衣服の選択に過大な意味を与えることで、織布工の暴力をその無軌道な消費行為へのある種の報復として許容している。発言内容もさることながら、ここで確認したいのは、「トム・シャトル」というキャラクターがそういう理由で女性に暴力を振るう織布工を代表していることだ。戦争を連想させないのが「シャトル代将」との大きな違いである。

織布工自身がステレオタイプ化される様はWJSの別の投稿によっても確認できる。前章で分析した投稿群から時期的に少し離れた1719年12月、同紙に「W・ウィーバー（すなわち織布工）」が「音のしない織機から」送ったとする投稿が掲載される⁽⁶³⁾。そこでは織布工の現状をどのようにに描写すればよいかを細かく指示されている。

嗚呼。毛織物職人たちを描け、悲嘆に暮れ、すべての苦悩の根源たるキャリコに呪いの言葉を吐く一万の貧民に囲まれるように。

これに、千の教区の惨めな住人たちを足せ、かつては我が国の富と自らの生活の糧を稼ぐべく紡いでいたが、もはや赤貧の余生を紡ぐしかなかった者たちを。

次に、もっと多くの群衆を連れてこい、かつては（嗚呼！）織布に雇われていたのに、（すでに多すぎる貧者を抱えた）各教区の扶助を哀願し、来るべき冬の残酷さに恐れおのきながら手を伸ばしている。

しかし、親方の悲嘆は適切な表情の陰りで描写せよ、いつも豊かな暮らしをしていたが、恐るべき不況のことを考えて苦悶に満ちている。なぜならお金持ちの顧客に品物を積み上げ、一級品の価格より低い（嗚呼、低すぎる！）値段で売り、目の前の不幸な群衆に食べ物を供給するしかないからだ。

要するに、描写を指南している「ウィーバー」自身も含めて、仕事がなくなり貧しいと言っているのである。前景化するそのイメージに対して、キャリコを着て出歩いただけで襲撃される女性の姿は後ろの方で霞んでいる。彼女たちは「雀り取った安物のために自国の製品と庇護を忌み嫌う」という「政治に無関心な愚行」を犯していると断罪される。「キャリコ姉妹」が展開した自由の問題に対して、ここで「政治」とは国内産業の保護のことを指している。

こうした流れはニュース報道にも追うことができる。3章で見たように、戦闘場面が描き込まれていたキャリコ裂きのニュースの視座は、時間の経過に伴い、織布工と女性の対決だけに狭められてゆく。そして多くの場合、その描写自体が女性を辱めているか、辱めるコメントを添えるようになる。たとえば、1719年8月、逮捕されていた織布工が刑罰としてさらし台に立った際、WJBの報道は織布工が受けるべき刑罰を女性へと転じている。

先週の水曜日、織布工がスピタルフィールズでさらし台に立った時、キャリコを着た3人の女性が馬車に乗り現れ、まるで侮辱するかのよう、さらし台の周りを駆け回った。観衆の中にいた織布工の数人がこれに気づき、馬車を包囲して、鳥肉屋が羽根をむしるように、キャリコをきれいさっぱりひっぺがした。同日、別の場所でも同じように飾りを剥ぎ取られた人がいたらしい。かような行いは、我らが同胞、織布工諸君にとって、決して利益とはなるまい。⁽⁶⁴⁾

投石の雨に加え衆目にも晒すことで、さらし台は主に罪人の名誉を傷つける刑罰である⁽⁶⁵⁾。ここでは、まず織布工が辱められており、そこに女性が登場して制裁に加わる（とされる）。この描写が女性にキャリコ裂きへの報復者という主体性を与えるのだが、馬車が襲われる場面になるとその主体性は剥奪されてしまう。馬車が公式の刑罰の場の特設された臨時のさらし台となり、女性の傲慢さが非公式に裁かれるのである。これに追い打ちをかけるのが鳥肉加工の喩えである。ここには女性を脱がせる（undress）ことと鳥をさばく（dress）こと、つまり脱ぐことと着ることが同義になるパラドクスが示唆されている⁽⁶⁶⁾。しかし、忘れてはならないのは、この記事が末尾で、女性への暴力を織布工に限定していることだ。描写自体の暴力や描写による暴力のレトリカルな利用は置き去りにされ、織布工による暴力が彼ら自身の問題として諫められている。キャリコ裂きを報じるまた別のニュースでは、織布工が「じっと座って飢え死にすることができず、あらゆる機会にキャリコへの怒りを表出させている」とされる一方、女性は「その住人が公然と反抗姿勢を見せていることを知らないはずはない服を着て姿を見せる愚か者もいる」と非難される⁽⁶⁷⁾。織布工は乱暴であるがゆえに言及に値する。すでに暴力的な彼らの描写には女性蔑視が重ねられやすい。こうして「キャリコ裂き」という舞台を構成した「スピタルフィールズの織布工」と「キャリコ嬢」という2人の役者が出揃うのである。

キャリコ裂きを戦争に喩えて風刺するような姿勢はもはや流行遅れとなったようである。スピタルフィールズの織布工が帯びていた暴力のステレオタイプは、女嫌いの言説を重ねて間接的に女性を辱めるという別の目的に利用されることになった。現在のジェンダー論的消費文化史を後者の系譜に対する批判的な応答として理解するならば、本稿が試みた戦争の喩えの再発見は「キャリコ裂き」としてパッケージ化された民衆暴力の中身を取り出して並べてみる試みであった。つまり、基本的場面とされる織布工と女性の邂逅から話を始めず、ジェンダーも含めたより複合的な視座から当時の社会の暴力を考えることである。それはとりもなおさず、キャリコ裂きとして現象した織布工の暴力が、幾重にも重なった暴力の構造の中で起きていることを認識することなのである。

おわりに

本稿は主に経済史と消費文化史において議論されてきたロンドンの織布工の騒擾を、研究史も含めて、どのように説明されてきたか、という観点から語り直したものである。事件の意味を「キャリコを裂くこと」に限定せず、「スピタルフィールズの織布工」をめぐるステレオタイプの伝統、党派対立という政治文化、そして週刊新聞における戦争報道というメディア環境に基づいて再解釈した。研究史において織布工の騒擾はジェンダー化されたイデオロギーに支えられた暴力だったと論じられてきたが、本稿はまず、消費する女性と並んで、そうしたイデオロギーに基づいて暴力を振るう織布工がキャラクター化されていることを指摘した。そして、キャラクター化して織布工の暴力を語ることが加害者や被害者をステレオタイプによって無力化するだけでなく、党派対立と国際戦争という当時の社会を方向付けていた現象を風刺する方法でもあったことを確認した。

18世紀初頭ロンドンという限定はあるものの、本稿が明らかにしたように騒擾などの集団暴力がさまざまな暴力と重ねてイメージされるものだとするなら、その重なりがどのレベルまで事件

の一般的理解として承認されるのか、という観点は極めて重要となる。週刊新聞での論争においては、戦争と重ねることが避けられる一方で女性への蔑視との接触が妥当な方法として受け入れられていった。ここには、事件の意味を事件当時の説明のレトリックやメディア環境に依存した流動的な現象として扱うことの意義が示唆されている。こうした視点は、キャリコ裂きにラダイトの機械打ちこわしや経済論争や女嫌いの文化などを重ねてきた研究史が、人民の抵抗論やスペインとの戦争を重ねた事件当時の説明から始まる比較的長い系譜の中にあることに気づかせてくれる。扱い方の差はあるものの、騒擾の研究自体を歴史的現象として捉え直してゆくことができるのだ。本稿が試みた騒擾の説明方法の分析の意義は、このような比較史的研究の道を拓くことにあった。

注

- (1) 1721年に出版された王座裁判所の審理集の表紙に並べられた罪名リストには“Callicoe-tearing”が含まれており、この名称が固有名詞として用いられていたことが示唆されている。*A Compleat Collection of Remarkable Tryals, Of the Most Notorious Malefactors, at the Sessions-House in the Old-Bailey, from the Year 1706, to the last Sessions, 1720*, 4 vols. (1718-21), vol.III & VI.
- (2) M. Dorothy George, *London Life in the Eighteenth Century* (1925; London: Penguin, 1965), 178-196; E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class* (1963; Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1968), 322 n.2; George Rudé, *The Crowd in History* (New York: Wiley, 1964), 72-77; idem., *Hanoverian London 1714-1808* (London: Secker & Warburg, 1971), 185-187; Alfred Plummer, *The London Weavers' Company 1600-1970* (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), chaps.14 & 15.
- (3) Joseph P. Ward, *Metropolitan Communities: Trade Guilds, Identity, and Change in Early Modern London* (Stanford, California: Stanford U.P., 1997), chap.6; Tim Harris, *London Crowds in the Reign of Charles II: Propaganda and Politics from the Restoration until the Exclusion Crisis* (Cambridge U.P., 1987), chap.8; Richard M. Dunn, “The London Weavers' Riot of 1675,” *Guildhall Studies in London History* 1, no.1 (1973): 13-23; Plummer, *London Weavers' Company*, 162-168.
- (4) 「ラダイト以前」は Adrian Randall, *Before the Luddites: Custom, Community, and Machinery in the English Woollen Industry, 1776-1809* (Cambridge: Cambridge U.P., 1991) のタイトルから。E.J. Hobsbawm, “The Machine Breakers,” *Past and Present*, no.1 (1952): 57-70も参照。
- (5) Peter Linebaugh, *The London Hanged: Crime and Civil Society in the Eighteenth Century* (1991; Cambridge: Cambridge U.P., 1992), chaps.1 & 8.
- (6) E.P. Thompson, “The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century,” *Past and Present*, no.50 (1971): 76-136; idem., *Customs in Common* (London: Merlin Press, 1991), 337.
- (7) Robert B. Shoemaker, “The London ‘Mob’ in the Early Eighteenth Century,” *Journal of British Studies* 26, no.3 (1987): 273-304; Andrew Charlesworth and Adrian Randall, “Morals, Markets and the English Crowd in 1766,” *Past and Present*, no.114 (1987): 200-213; Adrian Randall, “The Industrial Moral Economy of the Gloucestershire Weavers in the Eighteenth Century,” in *British Trade Unionism 1750-1850: The Formative Years*, ed. John Rule (London: Longman, 1988), 29-51; idem., *Riotous Assemblies: Popular Protest in Hanoverian England* (Oxford: Oxford U.P., 2006), chap.6; 坂巻清『イギリス毛織物工業の展開——産業革命への途』(日本経済評論社、2009年)、170-174頁。

- (8) Joyce Appleby, *Economic Thought and Ideology in Seventeenth-Century England* (Princeton: Princeton U.P., 1976); 川北稔『洒落者たちのイギリス史——騎士の国から紳士の国へ』(平凡社、1986年)、162-185頁。
- (9) Christopher J. Berry, *The Idea of Luxury: A Conceptual and Historical Investigation* (Cambridge: Cambridge U.P., 1994).
- (10) P.J. Thomas, *Mercantilism and the East India Trade* (1926; London: Frank Cass, 1963); 西村孝夫『キャリコ論争史の研究』(風間書房、1967年); N.B. Harte, “The Rise of Protection and the English Linen Trade, 1690-1790,” in *Textile History and Economic History*, ed. by N.B. Harte and K.G. Ponting (Manchester: Manchester U.P., 1973), 74-112.
- (11) Donald C. Coleman, “Politics and Economics in the Age of Anne: The Case of the Anglo-French Trade Treaty of 1713,” in *Trade, Government and Economy in Pre-Industrial England*, ed. D. Coleman and A.H. John (London: Weidenfeld and Nicholson, 1976), 187-211; idem., “Mercantilism Revisited,” *Historical Journal* 23, no.4 (1980): 773-791; Tim Keirn, “Parliament, Legislation and the Regulation of English Textile Industries, 1689-1714,” in *Stilling the Grumbling Hive: The Response to Social and Economic Problems in England, 1689-1750*, ed. Lee Davison et al. (New York: St. Martin’s Press, 1992), 1-24; Perry Gauci, *The Politics of Trade: The Overseas Merchant in State and Society, 1660-1720* (Oxford: Oxford U.P., 2001), chap.6; Steve Pincus, “Rethinking Mercantilism: Political Economy, the British Empire, and the Atlantic World in the Seventeenth and Eighteenth Centuries,” *William and Mary Quarterly*, 3rd ser., 69, no.1 (2012): 3-34.
- (12) Beverly Lemire, *Fashion’s Favorite: The Cotton Trade and the Consumer in Britain, 1660-1800* (Oxford: Oxford U.P., 1991); idem., *Cotton* (Oxford: Berg, 2011); Chloe Wigston Smith, *Women, Work, and Clothes in the Eighteenth-Century Novel* (Cambridge: Cambridge U.P., 2013).
- (13) Chandra Mukerji, *From Graven Images: Patterns of Modern Materialism* (New York: Columbia U.P., 1983); Maxine Berg, “New Commodities, Luxuries and their Consumers in Eighteenth-Century England,” in *Consumers and Luxury: Consumer Culture in Europe 1650-1850*, ed. Maxine Berg and Helen Clifford (Manchester: Manchester U.P., 1999); idem., “In Pursuit of Luxury: Global History and British Consumer Goods in the Eighteenth Century,” *Past and Present*, no.182 (2004): 85-142; Jan de Vries, *The Industrious Revolution: Consumer Behavior in the Household Economy, 1650 to the Present* (Cambridge: Cambridge U.P., 2008); Giorgio Riello and Tirthankar Roy, ed., *How India Clothed the World* (Leiden: Brill, 2009); Giorgio Riello, *Cotton: The Fabric that Made the Modern World* (Cambridge: Cambridge U.P., 2013).
- (14) Laura Brown, *Ends of Empire: Women and Ideology in Early Eighteenth-Century English Literature* (Ithaca: Cornell U.P., 1993).
- (15) Richard Steele, *The Spinster: In Defence of the Woollen Manufactures* (London, 1720), 13; *Weekly Journal and British Gazetteer* [以下 *WJB*], 7 November 1719.
- (16) Chloe Wagston Smith, “‘Callico Madams’: Servants, Consumption, and the Calico Crisis,” *Eighteenth-Century Life* 31, no.2 (2007): 34. 同著者の *Women, Work, and Clothes*, 115 も見よ。Jonathan P. Eacott, “Making an Imperial Compromise: the Calico Acts, the Atlantic Colonies, and the Structure of the British Empire,” *William and Mary Quarterly* 69, no.4 (2012): 745, 749 f.47. 同著者の *Selling Empire: India in the Making of Britain and America, 1600-1830* (Williamsburg, Virginia: Univ. of North Carolina Press, 2016), 102-103 および 103 f.42 も見よ。
- (17) ベバリー・レミアは何度かトムソンを引き合いに出している。Beverley Lemire, *The British Cotton Trade*,

- 1660-1815, 4 vols. (London: Pickering & Chatto, 2010), 2:279; *ibid.*, *Cotton*, 54.
- (18) Natalie Rothstein, "The Calico Campaign of 1719-21," *East London Papers* 7, no.1 (1964): 8-9.
- (19) *The Weavers' Pretences Examined* (London, 1719); *A Further Examination of the Weavers' Pretences* (London, 1719); *The Linen Spinster, in Defence of the Linen Manufactures* (London, 1720).
- (20) *A Just Complaint of the Poor Weaver* (London, 1719); *The Spinster, in Defence of the Woollen Manufacture* (London, 1720); *The Female Manufacturers Complaint* (London, 1720).
- (21) William Hogarth, *The Fellow 'Prentices at Their Looms* (1747). BM 2896.
- (22) John L. McMullan, *The Canting Crew: London's Criminal Underworld, 1550-1700* (New Brunswick, N.J.: Rutgers U.P., 1984), 60-61; John Marriott, *The Other Empire: Metropolis, India and Progress in the Colonial Imagination* (Manchester: Manchester U.P., 2003), 51-5; *idem.*, *Beyond the Tower: A History of East London* (New Haven: Yale U.P., 2011), 29-35.
- (23) Marriott, *Beyond the Tower*, 69.
- (24) Marriott, *Beyond the Tower*, chap.3; Linebaugh, *op. cit.*, chap.1.
- (25) J.A. Downie, W.A. Speck, and T.N. Corns, "Archetypal Mystification: Polemic and Reality in English Political Literature," *Eighteenth-Century Life*, vol.7 (1982): 1-27.
- (26) Mark Hallett, *Spectacles of Difference: Graphic Satire in the Age of Hogarth* (New Haven: Yale U.P., 1999).
- (27) Michael Harris, *London Newspapers in the Age of Walpole: A Study of the Origin of the Modern English Press* (Madison: Fairleigh Dickinson U.P., 1987), chaps.1 & 9.
- (28) John Brewer, *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century* (Chicago: Chicago U.P., 1997), 98-122.
- (29) *The Tatler*, no.178, 27-30 May 1710 [以下Tおよび号数]. *The Spectator*, no.625, 26 November 1714 [以下Sおよび号数] も参照。
- (30) Erin Mackie, *Market à la Mode: Fashion, Commodity, and Gender in The Tatler and The Spectator* (Baltimore: Johns Hopkins U.P., 1997), chap.5; Brian Cowan, *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse* (New Haven: Yale U.P., 2005), chap.8.
- (31) T10, 155, 160, 178; S625.
- (32) Andrew Lincoln, "War and the Culture of Politeness: The Case of *The Tatler* and *The Spectator*," *Eighteenth-Century Life* 36, no.2 (2012): 60-79; *idem.*, "The Culture of War and Civil Society in the Reigns of William III and Anne," *Eighteenth-Century Studies* 44, no.4 (2011): 455-474.
- (33) John Richardson, "Modern Warfare in Early-Eighteenth-Century Poetry," *Studies in English Literature* 45, no.3 (2005): 557-577.
- (34) 1713年に和平が結ばれるスペイン継承戦争は多くの風刺作品を生んだ。その代表的なものはジョン・アーバースノットの『ジョン・ブル物語』(1712年)であろう。Alan A. Bower and Robert A. Erickson, eds., *John Arbuthnot: The History of John Bull* (Oxford: Clarendon Press, 1976). 戦争報道を特に利用した例としてはジョン・ゲイの『扇』(1713年)が知られている。Patrick J. Daly, Jr., "John Gay's *The Fan* and the 'Paper War' of 1713," *Clio* 29, no.3 (2000): 249-269.
- (35) *Weekly Packet* [以下WP], 6-13 June 1719.
- (36) *John Shuttle and His Wife Mary* (London, 1717).
- (37) "Friggat," "Rigging," and "Unrig'd," in B.E., *A New Dictionary of the Terms Ancient and Modern of the Canting*

- Crew (London, 1699).
- (38) *Weekly Medley or the Gentleman's Recreation*, 13 June 1719.
- (39) *WP*, 13-20 June 1719.
- (40) *Flying Post or the Post-Master*, 27 June 1719.
- (41) *WJS*, 8 August 1719.
- (42) Nichols Phillipson, "Politeness and Politics in the Reign of Anne and the Early Hanoverians," in *The Varieties of British Political Thought, 1500-1800*, ed. by J.G.A. Pocock, Gordon J. Schochet, and Lois G. Schwoerer (Cambridge: Cambridge U.P., 1993), 211-245.
- (43) Jeremy Black, *Politics and Foreign Policy in the Age of George I, 1714-1727* (Farnham, Surrey: Ashgate, 2014), chap.3; Shinsuke Satsuma, *Britain and Colonial Maritime War in the Early Eighteenth Century: Silver, Seapower and the Atlantic* (Woodbridge, Suffolk: Boydell Press, 2013), 191-99; Wolfgang Michael, trans. Annemarie MacGregor and George E. MacGregor, *England Unger George I: The Quadruple Alliance* (London: Macmillan, 1939), chaps.5, 6 and 9.
- (44) *WJB*, 20 June 1719.
- (45) *OWJ*, 18 July 1719.
- (46) *WJS*, 11 July 1719.
- (47) *WJS*, 18 July 1719.
- (48) *WJS*, 1 August 1719.
- (49) たとえば *WP*, 1 August 1719.
- (50) *WJS*, 27 June 1719.
- (51) *WJS*, 25 July 1719.
- (52) *WJB*, 22 August 1719.
- (53) *WJB*, 29 August 1719.
- (54) Ibid.
- (55) *WJB*, 15 August 1719.
- (56) *WJS*, 8 August 1719.
- (57) *WJS*, 15 August 1719.
- (58) Ibid.
- (59) *WJS*, 22 August 1719.
- (60) *WJS*, 5 September 1719.
- (61) *WJS*, 12 September 1719.
- (62) *TJ*, 27 August 1719.
- (63) *WJS*, 12 December 1719.
- (64) *WJB*, 1 August 1719.
- (65) Robert Shoemaker, "Streets of Shame? The Crowd and Public Punishment in London, 1700-1820," in *Penal Practice and Culture, 1500-1900: Punishing the English*, ed. Simon Devereaux and Paul Griffiths (Basingstoke, Hampshire: Palgrave, 2004), 232-257.
- (66) 同様のさらし台の場面は他の新聞も報じたが、鳥肉屋の喩えはこの新聞だけが用いている。*Daily Courant*, 30 July 1719; *Whitehall Evening Post*, 30 July 1719; *FP*, 1 August 1719; *WP*, 25 July-1 August 1719; *OWJ*,

1 August 1719: *WJS*, 1 August 1719: *TJ*, 6 August 1719.
(67) *WJS*, 21 May 1720.

[査読を含む審査を経て、2019年8月20日掲載決定]
(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)